

# 女三宮はニヨサンノミヤ

―保坂本にある〈女御宮〉とその周辺―

『言語の研究』一号  
二〇一五年七月

浅川 哲也

はじめに

帝の第三内親王の意を表わす「女三宮」という語は、『源氏物語』中の登場人物名のひとつとしても知られている。現在では、この「女三宮」を「オンナサンノミヤ」と読む場合が多いのであるが、「ニヨサンノミヤ」とする読み方もある。「女三宮」の読み方としてはいずれが適切な読み方なのであろうか。

先に、拙稿「匂宮はニオウミヤ―「宮」に「の」が上接しない例―」(『都大論究』第四四号、平成一九年六月)において、『源氏物語』など中古和文の文学作品での「宮」に格助詞「の」が上接しない例について次のようにまとめた。

1、「父宮・母宮・姉宮・叔母宮」など親族を著す名詞は原則として「の」を介さずに直接「宮」に接続するが、「弟宮・妹宮・孫宮」などの例外がある。

2、「男宮・女宮・姫宮」など一語化した語には「の」は入らない。  
3、用言が「宮」を修飾する場合は「の」を介さずに直接「宮」に接続する。(例：故き宮)

4、接頭語や用言を基とする造語成分は「の」を介さずに直接「宮」

に接続する(例：今宮・大宮・他宮・故宮・若宮)。

この調査の際に、『源氏物語大成 校異篇』の本文中にある「男宮」の例は「おとこ宮」一例・「おとこみや」一例、「女宮」の例は「女宮」一九例・「女みや」一例であることを確認したが、「女宮」は「オンナミヤ」と読まれていたようである。

しかし、「女三(の)宮」のように、内親王の序数詞を間に介する場合の平安時代当時の読み方を確定できる仮名書きの例が管見の限りでは見あたらない。そのため、本稿では、『源氏物語』を含めた種々の文献資料に見られる「女(の)宮」等の表記例についての周縁的な分析によって「女三宮」の妥当な読み方の検討をすることとする。

一、「女三宮」の読み方についての現状確認

――「古語辞典等における「女三宮」の読み方

いま手元にある小型・中型の古語辞典で「女三宮」をどのように扱っているかについて調査し、「女三宮」を見出し語として立てているかまたはその他の箇所で採りあげている古語辞典等を以下のA

〔Dのように整理した。<sup>①</sup>〕

A、見出し語などでは「を（お）んなさんのみや」のみを立て、「にょさんのみや」を見出し語として立てず、また「にょさんのみや」に言及するところのない辞典。

- (1) 『旺文社全訳古語辞典』（桜井満・宮腰賢）一九九〇年一月
- (2) 『旺文社全訳古語辞典 第二版』（桜井満・宮腰賢）一九九六年九月
- (3) 『旺文社全訳古語辞典 第三版』（宮腰賢・桜井満・石井正己・小田勝）二〇〇三年一〇月
- (4) 『旺文社全訳古語辞典 第四版』（宮腰賢・石井正己・小田勝）二〇一一年一〇月
- (5) 『旺文社全訳学習古語辞典』（宮腰賢・石井正己・小田勝）二〇〇六年一〇月
- (6) 『完訳用例古語辞典（学研）』（金田一春彦・小久保崇明）一九九九年四月
- (7) 『学研全訳古語辞典』（金田一春彦・小久保崇明）二〇〇三年二月
- (8) 『角川全訳古語辞典』（久保田淳・室伏信介）二〇〇二年一〇月
- (9) 『三省堂全訳読解古語辞典 初版』（鈴木一雄・外山映二・伊藤博・小池清治）一九九五年一月
- (10) 『三省堂全訳読解古語辞典 第二版』（鈴木一雄・外山映二・伊藤博・小池清治）二〇〇一年一月
- (11) 『三省堂全訳読解古語辞典 第三版』（鈴木一雄・外山映二・伊藤博・小池清治）二〇〇七年三月

(12) 『三省堂全訳読解古語辞典 第四版』（鈴木一雄・外山映二・伊藤博・小池清治）二〇一三年一月

(13) 『東書最新全訳古語辞典（東京書籍）』（三角洋一・小町谷照彦）二〇〇六年一月

- (14) 『ベネッセ全訳古語辞典』（中村幸弘）一九九六年十一月
- (15) 『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』（中村幸弘）二〇〇七年一月
- (16) 『全訳全解古語辞典（文英堂）』（山口堯二・鈴木日出男）二〇〇四年一〇月

- (17) 『古語林（大修館）』（林巨樹・安藤千鶴子）一九九七年一月
- (18) 『福武古語辞典』（井上宗雄・中村幸弘）一九八八年九月
- (19) 『ベネッセ古語辞典』（中村幸弘）一九九七年一月

B、見出し語などでは「を（お）んなさんのみや」を立て、「にょさんのみや」を見出し語に立ててはいないが「にょさんのみや」についての記述もある辞典。

- (20) 『旺文社古語辞典 中型新版』（今泉忠義・守随憲治）一九六五年二月
  - (21) 『旺文社古語辞典 新訂版』（松村明・今泉忠義・守随憲治）一九七五年一〇月
  - (22) 『学研新・古語辞典』（市古貞次）一九八六年十二月
  - (23) 『全訳古語例解辞典 第二版（小学館）』（北原保雄）一九九六年一月
  - (24) 『小学館全文全訳古語辞典』（北原保雄）二〇〇四年一月
- C、見出し語として「を（お）んなさんのみや」・「にょさんのみや」

の両方を立てている辞典。

(25)『日本国語大辞典 第一版』一九七二～七六年

(26)『日本国語大辞典 第二版』(北原保雄・久保田淳・谷協理史ほか)

二〇〇一年一月

(27)『精選版 日本国語大辞典』(北原保雄・久保田淳・谷協理史ほか)

二〇〇六年一月

D、見出し語で「によさんのみや」のみを立て、「を(お)んなさんのみや」を見出し語として立てていない古語辞典。

(28)『角川古語大辞典』(中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義) 一九九九年三月

「女三宮」を見出し語として立てている小型の古語辞典のほとんどが読み方を「をんなさんのみや(おんなさんのみや)」としている。その中で、(20)『旺文社古語辞典 中型新版』(今泉忠義・守随憲治監修、昭和四〇年二月)・(21)『旺文社古語辞典 新訂版』(松村明・今泉忠義・守随憲治編、昭和五〇年一月)は、「をんなさんのみや」の項目内に「によさんのみや」について記述した箇所がある。また「をんないちのみや」・「をんなにのみや」の立項があり、それぞれに「Ⅱによいちのみや」・「Ⅱによにのみや」という記述がみられる。しかし、これらの古語辞典の改訂版である『旺文社古語辞典 新訂版』(松村明・今泉忠義・守随憲治編、昭和五六年一月)からは、以上の「によさんのみや」等の記述がすべて削除されてしまっている。<sup>(2)</sup>

「によさんのみや」について言及する古語辞典としては、他には

わずかに(22)『学研新・古語辞典』(市古貞次編、昭和六二年二月)・(23)『全訳古語例解辞典 第二版』(北原保雄編、平成八年一月)・(24)『小学館全文全訳古語辞典』(北原保雄編、平成一六年一月)が挙げられる。しかし、いずれも見出し語の読みは「をんなさんのみや」である。

調査範囲では、「によさんのみや」を見出し語として立て、かつ「をんなさんのみや」を見出し語としない古語辞典は(28)『角川古語大辞典』(平成一一年三月)一書だけである。(28)には、見出し語として「によさんのみや」のほかに「によさん」の見出しも立てられている。ただし、同書の「によさんのみや」の項目の中には「源氏物語」では「をんなさんのみや」と読むのが普通。」という記述がある。

一―二、『源氏物語』の事典類における「女三宮」の読み方

『源氏物語』に関する事典類における「女三宮」の読み方の扱いについて調査した。<sup>(3)</sup>調査した範囲では、一書の例外なく、「をんなさんのみや」を読みまたは見出し語としている。

一―三、『源氏物語』の注釈書の本文における「女三宮」の扱い

『源氏物語』若菜上冒頭部分の「女三宮」の表記が見える箇所について、各注釈書等の本文の扱いを検討した。囲み数字は、底本の原文に存在しないテキストを校訂者が恣意的にルビの形で施すなどの処理をした問題のある注釈書であることを表わしている。

(1)『対校源氏物語新釈』(吉澤義則編、昭和二七年六月)

底本は「湖月抄」、対校本は尾張徳川家所蔵河内本。凡例には「原

本の仮名書の部分に適宜漢字を充て、宛字を正して、仮名遣を統一し：』とある。

その御腹の女三おんなさんの宮を、あまたの御中に、すぐれて悲しきものに思ひかしづき聞え給ふ。〈二七四頁②〉

しかし、『湖月抄』・尾張徳川家所藏河内本のいずれも当該箇所は「女三宮」と漢字で表記されているのであって、「をんなさん」という仮名書きは底本にはない。

(2) 『日本古典文学大系』(山岸徳平校注、昭和四六年一月、岩波書店)

底本は三条西実隆筆青表紙証本。凡例6によると、「底本の漢字中、語尾の表記されていない動詞には( )内に送り仮名を、また名詞には( )内に助詞を補ったものがある。ただし、『待(終止形以外)・思・給・申』は原則として、( )なしに補った。例 世( )中我(が)子」とある。

その御腹はらの女三( )の宮を、あまたの御中に、すぐれて愛かなしき物に、おもひかしづき聞え給ふ。〈二二二頁④〉

同書は「女三」の箇所には振り仮名を付けず、底本の漢字表記を正しく表わしており、また、「の」を校注者が補ったことを( )で示しているので厳密な校訂であるといえる。

〔3〕『日本古典文学全集』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男、昭和四九年二月、小学館)

底本は大島本。凡例6には、「耳なれない語や読み誤りやすい語に仮名を振り、送り仮名を加えたものがある。たとえば、女御にようこ上人うへひと衣きぬ(以下略)」とある。

その御腹おんなさんの女三みやの宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに思ひかしづきこえたまふ。〈二二頁⑦〉

底本の当該箇所は「女三」と漢字表記のみであるので、この凡例に拠れば「をんなさん」という振り仮名は校訂者が任意に補ったものということがわかる。

(4) 『源氏物語 全』(今泉忠義・森昇一・岡崎正継編、昭和五二年一月、桜楓社)

底本は首書源氏物語(青表紙本系版本)。凡例5には「適宜、送り仮名を加へた。但し、その場合は、私に加へた送仮名の右傍に\*を附して、他の送仮名と区別した。」とある。

その御腹はらの女三きの宮を、あまたの御中にすぐれてかなしき物に思ひかしづき聞え給ふ。〈六二二頁⑪〉

同じ今泉忠義氏による『源氏物語 現代語訳 六』(昭和五〇年、桜楓社)には、その本文にルビはないが、『源氏物語 全現代語訳(十二)』(今泉忠義、講談社学術文庫版、昭和五三年八月)ではル

ビが施されている。

その藤壺の女御腹の女三の宮を、大勢の内親王方の御中でも、特にかわいい姫宮として大切にお育て申しあげていらつしやる。(一一頁⑥)

講談社学術文庫版にある端書きには、「本文庫では、著作権者の了解を得て、一般読者に読みやすいように、訳文全部を現代仮名遣いに改め、難読と思われる漢字には広範囲にルビをつけ、また、小説として親しみやすいように、句点及び会話を改行にするなどの配慮を施しました。」とある。この文庫版での処置は原著者の今泉忠義氏とは無関係に行われたものであるという<sup>④</sup>。

〔5〕『新潮日本古典集成』(石田穰治・清水好子校注、昭和五五年九月、新潮社)

底本は明融本。凡例に「漢字には適宜振り仮名、送り仮名を施した。」とある。明融本に「をんな」という仮名表記はない。

その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに、思ひかしづききこえたまふ。(一一二頁⑥)

〔6〕『新編日本古典文学全集』(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男、平成八年十一月、小学館)

その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきも

のに思ひかしづききこえたまふ。(一八頁⑦)

底本は明融本。旧版にあたる(3)の底本は大島本であったから、同書新版の(6)では底本を変更したことになる。

(6)の凡例に漢字のルビについての言及はなく、(6)の旧版(3)の凡例6に相当する部分が(6)の凡例からは削除されてしまっているため、『新編日本古典文学全集』にある凡例だけでは、活字化された当該本文を底本の本文に復元することは不可能となる。従って、底本の原文そのものを確認しない限り、このテキストの読者は「をむなさん」という仮名書きが底本にあるものと誤解をしてしまうであろう。

(7)『新日本古典文学大系』(柳井滋校注、平成七年三月、岩波書店)  
底本は大島本。凡例6には「漢字には、必要に応じて読み仮名を( )にいて付す。」とある。この凡例から「(をんなさんのみや)」は校注者が任意に付したものと判断できるので、良心的な処置である。

その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしき物に、思ひかしづききこえたまふ。(二〇七頁①)

一四、底本の本文

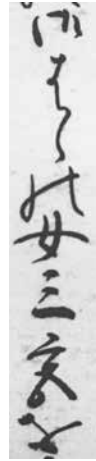
『源氏物語』の注釈書等が底本としている本文の当該箇所影印とその正確な翻刻を示すと以下のとおりである。〔 〕は改行箇所、

〔・〕は朱点、以下同)



其御はらの女三宮をあまたの／御中にすくれて、かなしきものに思ひかしづき聞え給、

『湖月抄』



その御はらの女三宮を・あまた／の御中に・すくれてかなしき物に思かしつき／きこえ／給・

〈大島本〉



その御はらの女三の宮をあ／またの御中にすくれてかなしき物におもひ／かしつき、こえたまふ

〈尾州家河内本〉



その御はらの女三・宮をあまたの御中に／すくれてかなしきものにおもひかしつき、こえ／たまふ

〈明融本〉



その御はらの女三宮をあまた／の御中にすくれてかなしき物におもひ／かしつききこえ給

〈三条西実隆筆青表紙証本〉

現在の注釈書が本文の底本としている諸写本等は、一様に「女三宮」という漢字表記であり、注釈書がルビ等で任意に処理している「をんなさんのみや」という読みを示すようなテキストはひとつもない。また、『源氏物語』の写本には、朱点が施されているものがある。『源氏物語』のテキスト研究においては、語彙についての書写者の語構成意識が朱点に現われることがあると考えられるので注意すべきである。明融本では、「女三・宮」のように「女三」と「宮」の間に朱点があり、「女三」を一語とみる意識のあることがうかがわれる。

二、『源氏物語大成』における「女（の）宮」

『源氏物語大成 索引篇』での見出し語はすべて「をんな／のみや」である。しかし『校異篇』の本文を見ると「をんな（の）宮」とする仮名書きの例は一例もない。大成本文中における表記の用例数は次のとおりである。

女一宮（六例）・女一の宮（九例）

女二の宮（五例）

女三宮（三例）・女三の宮（一例）  
女五宮（一例）・女五の宮（四例）

《柳多留拾遺》四・一三

女三の宮へ鈴杯を献上し／猫につけるやうに

《柳多留》一三五

女三の宮に天蓼の釣香炉／またたびは猫の好物

《柳多留》一一六

三、近世文学における「女三宮」の読み方の扱い

三―一、韻文での「女三宮」

浄瑠璃では、七五調・五七調の音数律があるので、「女三宮」の拍数すなわち読み方を推測することが可能である。次に挙げる近松の浄瑠璃の例では、音数律からみて「女三」を「にょさん」と読んでいるようである。

フシころり火燵にしなだれて。フシ懐くも己が。戀ならん。地

それは昔の女三の宮はおさんの當世女。

近松門左衛門『大経師昔暦』（正徳五年初演・一七一五年）

川柳では、五七五の一七音であるところから川柳で使用されている語の拍数を知ることが容易にできる。川柳では、「女三宮」は常に「にょさんのみや」と六拍で詠まれている。また、「女三（にょさん）」という三拍の語彙を使用した例もある。

焼物を女三の宮にしてやられ／猫が頂戴

《月並万句合》宝暦十年

女房が女三の宮で子が出来ず

《月並万句合》宝暦十年

はすはとハ女三の宮のわたりなり／蓮葉女

また、びのかほる女三の御手箆筥

《柳多留》一四八

なお、『新編川柳大辞典』（粕谷宏紀編、平成七年九月、東京堂出版）では、「にょさんのみや」「女三の宮」が見出し語として立てられている。同書に「おんなさんのみや・をんなさんのみや」の立項なし。「にょさんのみや」の見出しで「おんなさんのみや」とも。」とある。江戸時代の川柳においては、「女三宮」を「にょさんのみや」と読むことが一般的であったようである。

三―二、散文での「女三宮」

読本作家の曲亭（滝沢）馬琴は、「女三」に「にょさん」の振り仮名を付している。

もし人あつて此書を説バ、玄宗忽輦を駐、女三の猫も狂ふべし。

『蛭蝶児』曲亭主人序文（文化二年正月刊・一八〇五年）

女三の宮の翠簾をもち出ては。恋する人の媒やすらん。

滝沢馬琴『頼豪阿闍梨怪鼠伝』一七（文化五年刊・一八〇八年）



#### 四、中世の文献における「女三宮」の読み方の扱い

中世の韻文においても、音数律から見て「女三宮」は「ニヨサンノミヤ」と読まれていたことがわかる。『ふくろうのさうし』の「によさんのみやの立姿」は、七・五の成句であると見られる。

朱雀院の間(ひ)し御心(おんこころ)恥(ぢ)てもいかゞ恥(ぢ)ざらむ  
女三の宮の柏木も 薫(かほ)の行方(ゆくへ)と思へば…

『宴曲集』 卷第三「源氏戀」

伏待(ふしま)の月差(つきさ)し出(で)て 先(さき)づ女三(に)の宮を見奉(たてまつ)れば 人より殊(こと)に小(ち)くて…

『宴曲集』 卷第四「源氏」

なを、姫の御すかた、ものによく、たとふれば、女三(に)のみやのたちすかた、おほろ月夜の、なひしのかみ、かうきてんのほそ殿、たうのやうきひ、かんのりふじん、まつらさよ姫、そとをり姫、二てうのきさき、おの、小まち、そめ殿のきさき

『ふくろうのさうし』 明暦四年(一六五八年) 写本

また、室町時代末期の説話には「によさんのみや」という明らかな仮名書きの例が見られる。

みやきこしめし、いにしへ、かしわきのゑもんのかみ、によさんのみやを、しの(ひ)しとき

『朝貞のつゆ』 正保二年写本(一六四五年)

されは、によさんのみやは、けんしの大しやうの、つまなれとも、人のなけ、(なさけ)は、あわれむ、ならひにて

『朝貞のつゆ』 正保二年写本(一六四五年)

#### 五、「をんなさんのみや」説の根拠

五―一、本居宣長『玉勝間』における「女(に)の宮」の読み方

中世・近世を通じて、「女三宮」は「ニヨサンノミヤ」と読まれるのが一般的であった。しかし、現在のところ「女三宮」を「をんなさんのみや」と読むことが、注釈書・古語辞典・源氏物語辞典を含めて優勢であるのは、その根拠の一つとして本居宣長の『玉勝間』の説があるからである。

女一宮女二宮など申す唱へ(一七四)

女一宮女二宮など申す女字、音によみならへれども、榮華物語などに、男一宮男二宮などもある、男は音にはよむべくもあらざ、必(かならず)とこ一の宮などよむべければ、女もいにしへは、をんな一の宮、をんな二の宮などよみつらむ、ことわりをもて思ふにも、字音にはよむまじきつゞき也、

本居宣長『玉勝間』四の巻

引用文中の傍線箇所「音によみならへれども」によって、宣長の当時は、「女一ノ宮・女二宮」を「ニヨイチノミヤ・ニヨニノミヤ」



と読むことが一般的であったということがうかがえる。宣長の「をんな一の宮」説は、「ニヨイチノミヤ」と読む当時の慣習への宣長の反駁であった。

## 五―二、『栄花物語』における「女ゝ（の）宮」

本居宣長が「をんな一の宮」説の根拠とした『栄花物語』の「おとこゝ宮」の例は、以下のような例である。

世の御はじめ頃、かうて一所おはします凶しき事なりとて、村上の先帝の御女三宮は、按察の御息所と聞えし御腹におとこ三宮・女三宮生れ給へりし、その女三宮を、この攝政殿心にく、めでたきものに思ひきこえさせ給て、通ひきこえさせ給ひしかど、すべてことのほかにて絶え奉らせ給ひにしかば、その宮もこれを恥しき事におぼし歎きて失せ給にけり。

### 『栄花物語』巻第三・一二〇頁⑭

『栄花物語』本文と索引 自立語索引篇『高知大学人文学部国語史研究会、昭和六〇年、武蔵野書院』・『栄花物語』本文と索引 本文『高知大学人文学部国語史研究会、昭和六一年、武蔵野書院』によると、「男ゝ（の）宮」と「女ゝ（の）宮」の本文中での表記は次のとおりである。

おとこ二の宮（一例）、おとこ三の宮（一例）・おとこ三宮（一例）、おとこ七宮（一例）、おとこ九の宮（一例）、おとこ四五のみや（一例）、おとこ六八のみや（一例）

女一の宮（五例）、女二の宮（三例）・女二宮（二一例）、女三の宮（二一例）・女三宮（五例）、女四宮（一例）、女五宮（二例）、女六の宮（一例）、女九宮（二例）、女十宮（二例）、女一宮二宮（二例）、女七十九の宮（二例）、御女一宮（二例）、御女三宮（二例）

「おとこゝの宮」のように、「男ゝの宮」は平仮名表記の例のみである。「おとこ」とわざわざ仮名書きをしたのは、文脈上で「おとこゝの宮」と読ませる意図があったためではないか。人物を表わす名詞の「宮」は、本来男性の皇族を表わす名詞であり、ことさらに「男」を付して「男宮」とするのは、女性皇族の「女宮」と対比させるための「男の一の宮」という用法であったものと考えられる。しかし、『栄花物語』においても、女性皇族を表わす表記はすべて「女ゝ宮」なのであって、「お（を）んなゝ宮」という表記は一例もないのである。それは「女ゝ宮」の読み方として「ニヨノ宮」という言い方が既に固定化したものとしてあったからであると考えられる。

国文学研究資料館が公開している岩波日本古典文学大系本文データベースで縦断検索した範囲では、表記としての「お（を）」と「こゝ（の）宮」の例は、この『栄花物語』以外には見あたらない。「お（を）んなゝ（の）宮」「お（を）むんなゝ（の）宮」のような仮名表記の例も見あたらなかった。『日本国語大辞典』に「おとこいちのみや」・「おとこにのみや」・「おとこさんのみや」等の立項はない。

以上の点からみて、『栄花物語』にある「おとこゝの宮」の例が「女

（の）宮」を「おんな」（の）宮」と読むことの根拠になるとは考えがたい。

## 六、『源氏物語』の古注における「女」（の）宮

『源氏物語』の古注における「女」（の）宮」の表記例を【表1】に示す。

古注には、「によさんのみや・によさんの宮・によ三のみや」という「ニヨサン」の読みの明らかな仮名書きの例や、「女三よの宮」のように振り仮名で読みを示した例が見られる。

山の御かとのによさんのみやのかみそきの御いわゐによきしやうそくしたて山の御かとへおくり給ふとて

『源氏一部抜書』（猪苗代兼載、室町末期、六七頁上<sup>13</sup>）

によさんの宮返し（朱）

・おちそひてきえやしなましうきことの／おもひみたる、けふりくらへに

『源氏一部抜書』（朱筆、六七頁上<sup>13</sup>）

そのころによ三のみやときこえしはしゆしやくゐんのひめきみにておはします

『源氏こかゝみ』（南北朝時代頃成、二二六頁下<sup>14</sup>）

山の御かとの五十ねんのおんかの御かう二月廿日ころと女三よの

宮よ申させ給へはさらはならしに女かくせさせたてまつらむと

『源氏一部抜書』（七二頁上<sup>18</sup>）

また、「によ二のみや」・「によ十の宮」という漢字仮名交じりの表記が見え、室町時代には「女」（の）宮」は「ニヨノミヤ」と読まれていたことがわかる。

廿一かしは木といふはゑん（ゑもんのかみカ）のうせてもの思ひのころ女二のみやに夕きりの大しやうきたりてけさうし侍けるにによ二のみやの御かたにありけるねうはうのあひしらいかよめる

『源氏秘義抄』（作者不詳、室町末期、一〇頁下<sup>14</sup>）

比てんりやくのによ十の宮せんし内親王と申せしはかもよりをりゐ給ひ大斎院にてまします

『源氏抄』（交記、慶長一八年・一六一三年、三四〇頁上<sup>12</sup>）

古注には、「女一・女二の宮」・「女二・女三両宮」のように、複数の女宮を並列するという表現も散見される。これを見ると、「女一」・「女二」などは一語として認識されていたようである。

朱雀の御子五人有 今上女一・女二の宮・女三の宮・女四の宮

『源氏抄』（三二九頁上<sup>11</sup>）

葵をもろは草と云は二葉同様二生ル故也 是ヲ祭ノ日冠ニさす

		書名																	編著者		成立年代	
		『光源氏一部譚并詞』	『明星抄』	『源氏抄』	『源氏小鏡』	『紹巴抄』	『浮木』	『源氏一部抜書』	『源氏秘義抄』	『雨夜談抄』	『紫塵愚抄』	『種玉編次抄』	『花鳥余情』	『源概抄』	『源氏最要抄』	『河海抄』	『源氏こかゝみ』	不詳	編著者	成立年代		
計		(一六四七)	正保四年写 (一六〇六)	慶長一年写 (一六二二)	慶長一八年 (一六二〇)	慶長一五年 (一五六五)	永禄八年 (一五五九)	永禄二年成 (一五五九)	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期	室町末期		
199			127			35	28		1	1		1		1		5			女三宮			
135	10	5	6	7	31		22				7		32	14	1				女三の宮			
1															1				女三みや			
26	8				6				6					1	5				女三のみや			
6							6												女三の宮			
1							1												によさんのみや			
13																	13		によ三のみや			
1							1												によさんの宮			
2																	2		によ三			
197		17	1	3	159						10				7				女三			
60		25			20	6							9						女一宮			
20			4		8	1	1						6						女一の宮			
6		1	1		4														女一			
80		32			8	8		1				5	25			1			女二宮			
37	7	7	8	1	8								4	2					女二の宮			
6				2				2						1	1				女二のみや			
5								1									4		によ二のみや			
98	3	1	1		93														女二			
2	1		1																女四の宮			
4	1				1											2			女五宮			
6	2		4																女五の宮			
2							2												女この宮			
1													1						女五			
1	1																		女御の宮			

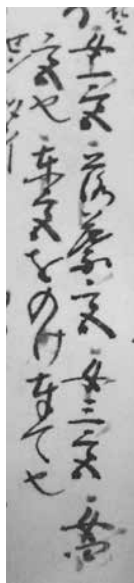
【表1 古注における「女～宮」の例】

故にもろかつらとよめる也 女二・女三兩宮の御事をそへよめる也

『浮木』(橋本公夏、永祿二年成・一五五九年、二四〇頁下<sup>15</sup>)

## 七、「女」(の)「宮」の語構成意識

穂久邇文庫所藏『覺勝院抄 源氏物語聞書』(元龜二年以前成立・一五七一年)の「若菜上」の書き入れとそれに施された朱点とを見ると次のとおりである。



・女・一宮・落・葉宮・女・三宮・女・四宮也・東・宮をのけ奉て也

「女・一」・「女・三」・「女・四」のように「女」と序数詞とは朱点の「・」で結ばれている。これは「落・葉」と同様に、朱点で結ばれた上下の漢字を結びつけて一語としているということである。これを支持する類例として、明融本の「若菜上」の当該箇所が「女三・宮」のように、「女三」と「宮」の間に朱点が打たれていることが指摘できる。

室町時代の当時、「女」(の)「宮」の語構成意識は、「女・三の宮」ではなく、「女三・の宮」のように意識されていたのではないか。

『覺勝院抄 源氏物語聞書』に置かれた朱点の位置を見る限り、「女三」は一語として意識され、一つの漢語のように「ニヨサン」と字音で読まれていたものと考えられる。

## 八、保坂本における「女五宮」

別本系統の写本のひとつとされる保坂潤治氏旧藏源氏物語(保坂本)の「明石」には、「女五宮」を「女御宮」と書写した一文がある。



さかの御つたへにて女御宮さる世のなか／の上手にものし給けるを

保坂本の他の箇所では、「女五宮」を「女このみや」(朝顔)、または「女このみや」(朝顔)、「女五の宮」(朝顔)、「女五宮」(少女)と表記しているので、「明石」の当該例は「女五宮」とすべきところを「女御宮」と誤写したものと思われる。保坂本におけるこのテキスト上の誤写が発生した原因としては、書写の当時、「女五宮」と「女御宮」が同音であったためではないかと考えられる。

これを裏づけるものとして、古注にも「女五の宮」を「女御の宮」と書写した例のあることが確認できる。

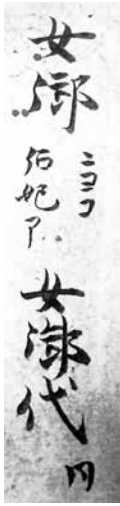
このも、その、宮に女御の宮として源氏などの御おはも住給ふ、あま君にてすくし給ひし人なり、…女五宮は御けはひもふるめかしく、しはふきかちによいまとひおさへし給ひて、…

『光源氏一部譚并詞』（作者不詳、正保四年写、四六六頁上⑤）

『光源氏一部譚并詞』は、『源氏大鏡』（南北朝頃に成立）の梗概書とみられる。『源氏大鏡』の伝本に四類あるうち、『光源氏一部譚并詞』は第一類に属する古態を遺した写本であり、依拠した『源氏物語』本文は河内本または別本系であるという③。

## 九、「女御」の音価について

「女五」という語彙の平安時代における音価を知ることのできる資料は見当たらないが、『色葉字類抄』（尊経閣文庫蔵前田家本）によると、平安時代末期での「女御」の読み方は二拍の「ニヨゴ」である。また、声点は平声・平声であり、アクセントは「低低」であるとわかる。



女御 ニヨゴ／后妃下

『類聚名義抄』巻上 仁 疊字「四〇オ五」

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊『日本語アク

セント史総合資料 索引篇（一九九七年二月、東京堂出版）によれば、室町時代末期から江戸時代中期にかけての「女御」の拍数とアクセントは次のとおりである③。

にようじ 1 HHH 名目  
にようじ 2 HHH 名目 平節

また、節用集によると、「女御」の読みは「ニヨウゴ」（饅頭屋本）・「ネウゴ」（易林本）・「ニヨウコ」（黒本本）となっており、いずれも長音を含む三拍である⑩。これら平安時代末期から江戸時代初期にかけてのアクセント史資料によれば、推定される「女御」の音価の推移は次のとおりとなる。

ニヨゴ V ニヨウゴ V ニヨウゴ

保坂本にある「女御宮」という誤写発生の原因のひとつが、当時の「女御」と「女五」の音韻が同一であったためであると仮定すると、「女五宮」は「ニヨゴノミヤ」または長音一拍を含む「ニヨウゴノミヤ」と読まれていた可能性がある。同音であることが理由で、「女五」を「女御」と誤写したのであれば、誤写が発生した時点で、「女御」と「女五」の二語はアクセントの型も同じであったものと考えられる。

## まとめ

これまで述べてきたことをまとめると以下のとおりである。

- (1) 調査した範囲では、『源氏物語』の写本に「女三宮」を「オンナサンノミヤ」と読むことのできる仮名書きの例は見あたらない。
- (2) 中世・近世を通じて「女三宮」は伝統的に「ニヨサンノミヤ」と読まれていた。

- (3) 「女三」は一語として認識されており、「女三宮」の語構成意識は「女三・の・宮」であったと考えられる。

- (4) 「女五宮」が「ニヨゴノミヤ」または「ニヨウゴノミヤ」と読まれていた形跡がある。

これらの点から考えると、「女三宮」の読み方は、「ニヨサンノミヤ」とするのが妥当である。

## 用例の出典

『大島本 源氏物語 第六卷』平成八年五月、角川書店、『尾州家河内本 源氏物語 第六卷 若菜上・若菜下』二〇一二年八月、八木書店、『東海大学蔵 桃園文庫影印叢書 第一卷 源氏物語 明融本』I 平成二年六月、東海大学出版会、『青表紙本 源氏物語 若菜上』昭和四四年七月、新典社、『湖月抄』講談社学術文庫、昭和五七年五月、近松門左衛門『大経師昔暦（岩波書店日本古典文学大系「近松浄瑠璃集上」二二九頁）、嘶本「蛭蝶児」曲亭主人序文（『嘶本大系』第十四卷、東京堂出版）、滝沢馬琴『頼豪阿闍梨怪鼠伝』一七（早稲田大学図書館蔵本）、『宴曲集』巻第三「源氏戀」（岩波書店日本古典文学大系「中世近世歌謡集」七四頁）、『宴曲集』巻第四「源氏」（岩

波書店日本古典文学大系『中世近世歌謡集』八〇頁）、『朝良のつゆ』正保二年写本（一六四五年）（『室町時代物語大成』第二、昭和四八年、角川書店）、『ふくろうのさうし』（『室町時代物語大成』第十一、昭和五八年、角川書店）、『玉勝間』（『本居宣長全集』第一巻、筑摩書房、一二三頁）、『栄花物語』（岩波書店日本古典文学大系）。

## 注

- (1) 調査した範囲の古語辞典で、見出し語その他で「によさんのみや・」を（お）んなさんのみやのいずれも取り立てていないものは以下のとおりである。（一）内に編集者・編集代表者名を示す。

『岩波古語辞典』（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎）一九七四年二月、『岩波古語辞典 補訂版』（大野晋・佐竹昭広・前田金五郎）一九九〇年二月、『旺文社古語辞典 新版』（松村明・今泉忠義・守随憲治）一九八一年一〇月、『旺文社標準古語辞典 新装版（鈴木一雄）一九七三年一月、『旺文社高校基礎古語辞典 第二版（古田東朔）一九九六年九月、『学研古語辞典』（吉沢典男）一九六八年九月、『角川新版古語辞典』（久松潜一・佐藤謙三）一九八〇年一月、『角川必携古語辞典』（山田俊雄・吉川泰雄・室伏信介）一九八八年一月、『角川必携古語辞典』（山田俊雄・吉川泰雄・室伏信介）一九九七年一月、『講談社キャンパス古語辞典』（馬淵和夫）一九九五年一月、『講談社古語辞典』（佐伯梅友・馬淵和夫）一九九九年二月、『講談社古語辞典 新装版』（佐伯梅友・馬淵和夫）一九九七年二月、『三省堂古語辞典 修訂版』（小

松英雄・佐伯梅友) 一九九四年一〇月、『三省堂全訳基本古語辞典 第二版』(鈴木一雄) 二〇〇〇年一月、『三省堂全訳基本古語辞典 第三版』(鈴木一雄) 二〇〇三年一月、『例解古語辞典 第三版』(三省堂) (佐伯梅友・小松英雄・鈴木丹士郎ほか) 一九九二年一月、『新明解古語辞典 第三版』(三省堂) (金田一春彦) 一九九五年二月、『新選古語辞典 新版』(小学館) (中田祝夫) 一九七四年二月、『大修館全訳古語辞典』(林巨樹・安藤千鶴子) 二〇〇一年一月、『福武コンパクト古語辞典』(中村幸弘) 一九九〇年一月、『ベネッセ全訳コンパクト古語辞典』(中村幸弘) 一九九九年一月、『最新詳解古語 五版』(明治書院) (佐藤定義) 一九九五年一月、『小学館古語大辞典』(中田祝夫・和田利政・北原保雄) 一九八三年二月、『時代別国語大辞典 室町編』(三省堂) (室町時代語辞典編修委員会) 二〇〇〇年二月。

- (2) 今泉忠義氏は昭和五十一年一月に死去している。今泉氏は「女三宮」の読み方を「ニヨサンノミヤ」とする立場であった。  
(2)の「ニヨサンノミヤ」に係る記述は、今泉氏死去の後に削除されてしまったのではないかと思われる。

(3) 調査対象とした事典類は以下のとおりである。

『源氏物語辞典』(北山谿太) 一九五七年一〇月、『源氏物語事典 上・下』(池田亀鑑) 一九六〇年三・六月、『源氏物語事典』(岡一男) 一九六四年二月、『源氏物語事典』(三谷栄一) 一九七三年七月、『源氏物語必携』(秋山虔) 一九七八年一二月、『源氏物語事典』(秋山虔) 一九八九年五月、『源氏物語事典増補版』(三谷栄一) 一九九二年一〇月、『常用源氏物語要覧』

(中野幸一) 一九九五年一二月、『源氏物語ハンドブック』(秋山虔・松岡心平・渡辺保) 一九九六年一〇月、『新・源氏物語必携』(秋山虔) 一九九七年五月、『源氏物語を知る事典』(西沢正史) 一九九八年五月、『源氏物語必携事典』(秋山虔・室伏信助) 一九九八年一二月、『源氏物語事典』(林田孝和) 二〇〇二年五月、『源氏物語作中人物事典』(西沢正史) 二〇〇七年一月、『源氏物語大辞典』(秋山虔・室伏信助) 二〇一一年二月。

これらの事典はすべて「をんなさんのみや(おんなさんのみや)」であり、「女三宮」を「ニヨサンノミヤ」とするものは皆無である。

(4) 大久保一男氏の直話による。

(5) <http://www.nijiac.jp/pages/database/>

(6) 古注の用例は、玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』(角川書店、昭和四三年六月) および中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊』(武蔵野書院) に拠る。『花鳥余情』源氏和秘抄 源氏物語之不審条々 源語秘訣、口伝抄(昭和五三年一二月)、『明星抄種玉編次抄 雨夜談抄』(昭和五五年一二月)、『源氏秘義抄源氏最要抄 浮木 源氏抄 紫塵愚抄』(昭和五七年七月)、『紹巴抄』(平成一七年)、『源氏釈 奥入 光源氏物語』(平成二一年九月)、『源氏一部抜書 源概抄 源氏こか、み 源氏小鏡 光源氏一部譚并詞』(平成二二年五月)、用例の位置を示すページ数・上下段・行数はすべて同書に拠る。

(7) 『源氏物語別本集成』(おうふう) の「明石」は、保坂本を校合本としていないので、異同例として「女御宮」を挙げてい



ない。

(8) 中野幸一編『源氏物語古註釈叢刊 第十卷』(平成二年五月、武蔵野書院)の「解題」による。

(9) 「にようご」のアクセントの出典は、『名目抄』室町末期〜江戸初期(『名目抄 声点付語意索引』上野和昭、一九九一年、アクセント史資料研究会)と、『平家正節』である。これは、主に江戸中期頃までのアクセントである。

(10) 『改訂新版 古本節用集六種 研究並びに総合索引』(二〇〇九年、勉誠出版)による。

# 【付記】

本稿は、國學院大學 国語研究会 平成二四年度後期大会(平成二四年十二月一日)において「女三宮はニヨサンノミヤ」という題目で口頭発表した内容に加筆したものである。発表の席上で御指導を下さった先生方に御礼を申し上げる。

(あさかわ・てつや 首都大学東京)